

連載小説「女装強要妄想ノート」

4. 妹と一緒に卒服を着せられる

昼前に佐々木真弓が高校から帰ってくると、ちょうど妹の亜弓も帰ってきたところだった。玄関を開けたままポーチで彼女を出迎え、

「おかえり、亜弓。卒業式、お疲れ様」

「ただいまー。ほんと、疲れていやんなっちゃうわ。どうせほとんどみんな中等部で一緒なのに、みょーにしんみりしちゃってさー」

はすに笑いながら、卒業証書の入った筒でわざとらしく肩を叩く。しかしその目元が微かに赤くなっているのを、真弓は見逃していなかった。

兄妹が通っているのは、同じ私立の一貫校である。大学と高等部は共学だが、中等部と附属小学校は男女別になっていて、大半の生徒・児童はそのまま進級することになるのだ。

今日は二人とも卒業式——高等部1年生の真弓は在校生として送り出す側、そして初等部6年生の亜弓は、卒業生として送り出される側の卒業式を終えたところであった。

真弓は家の中に入りつつ、妹の服装に目を向けて、

「それにしても、今日は卒業式の式典なのに、制服じゃないんだね」

「あ、やっぱり兄ちゃん、こっちが気になるんだ？」

揶揄うように妹が言うと、真弓は少し赤くなる。見慣れない女子用のストラップシューズを脇にどかして、誤魔化すように靴を脱いで玄関に上がる。

亜弓が着ているのは、制服ではなく女子用スーツ——しかしスカートではない、ショートパンツタイプのスーツであった。紺のジャケットにすっきりとした青のネクタイが、ショートカットでイケメンな彼女のボーイッシュな印象をさらに強めている。足元もヒールの高いブーツを履いているため、靴を履くと160近く——高校生にもなって140センチ足らずの兄とは、20センチ近い身長差ができていた。

「やっぱりねー。どうせ兄ちゃん、自分もこういうのを着てみたかった、って思ってるんでしょ？」

「えっ……う、うん、まあ……」

「んー？ なにその煮え切らない反応は——って、ああ、そういうことか。兄ちゃん——」

亜弓はにんまり笑って兄の顔を覗き込み、

「兄ちゃん、自分だったらスカートスーツの方がよかったのになって思ってるんでしょ？」

「っ！？」

顔色を変える真弓に、

「あはははっ、やっぱりね！ 兄ちゃんのほうがあたしよりずっと女の子らしいんだから」

「ふふっ、そんなに笑ったら可哀そうでしょ、亜弓。あなたが男の子っぽい服が好きなように、お兄ちゃんは女の子っぽい服が好きなんだから」

ふと現れた母親が、おっとり笑って言う。

「か、母さんまで……！」

「ふたりとも、玄関ですっとおしゃべりしてるんだもの。おやつもあるから、早く手を洗っていらっしやい。——ああ、亜弓ちゃんはまだ、着替えないでおいでね」

「はい」

兄妹は素直に返事して、2階の自室に上がっていった。バッグを置いてリビングに戻ると、

「あっ……」

「へえ……」

リビングの壁にかかっていたものに、二人はそろって驚きの声を上げる。

紺のジャケット。真っ白なブラウス。赤チェックのスカートとリボン。胸元に輝くエンブレム。

それは亜弓が着ているような卒服女子スーツ——それもパンツタイプではない、スカートタイプの卒服だった。

「ふふっ、どう？ 亜弓ちゃんはパンツタイプの方がいいみたいだけど、お兄ちゃんはこっちの方がいいんでしょ？」

「う、うん……あ、ありがとう、母さん……」

目の前に用意された自分の「卒服」に、真弓は嬉しさと気恥ずかしさで胸がいっぱいになる。

「妹の卒業式に、自分も女子スーツを着せられる——」

それはまさに、リビングに置かれた「女装妄想ノート」にもある一文の通りの展開だった。

「うんうん、お兄ちゃんが喜んでくれて、ママも嬉しいわ。というわけで、早く着替えてらっしやい。二人一緒に、記念撮影しましょ」

「うん……」

「くすくすっ、よかったね、兄ちゃん。長年の夢がかなって」

「うう……確かに、そう言えないこともないけど……でも、高校1年生にもなって女兒用スーツを着せられるのは、やっぱりちょっと恥ずかしいんだって……しかも、亜弓がパンツなのに、オレはスカートで……」

「またまた、何を言い出すのかと思ったら」

亜弓は意地悪く笑って、

「その恥ずかしいのが、好きなくせに。ほら、さっさと着替えてきなさい、真弓ちゃん」

「うっ……は、はい……」

まさに凶星を刺されて何も言い返せず——真弓は壁にかかっている女兒スーツを下ろして、2階に上がってゆくのだった。

「……はあ」

高校の男子制服を脱いでいつも通りハンガーに吊るし、シャツとソックス、さらに下着も洗濯に出せるようにまとめて——全裸になった真弓は、大きく息をつく。

「何かもう、雑に理由を付けては女装させられるのが当たり前の流れになってきてる……まあ、あのノートのせいなんだけど……」

女装させられたいシチュエーションを密かに書き溜めていた、「女装妄想ノート」。あれが母親に見つかったのがすべての現況であり、ある意味自業自得であると同時に、亜弓の指摘通り「願いがかなっている」ともいえるのだが、恥ずかしさに変わりはない。

クローゼットにはすでに、今まで着せられた女兒服とメイド服が入っていて、引き出しには下着類も充実し始めていた。

真弓はその中から、前回着せられたブラジャーとショーツのセット、ハイソックスを取り出す。いずれも色は純白だ。

「卒服なんだから、高学年向けの方がいいよね……」

自分に言い訳するように呟きつつ、ソックスを履き、ショーツを穿き、ブラジャーに腕を通して、背中後ろに手をまわしてホックを留める。特に下着については言われていないのだが、妙なところでこだわりのある真弓にとって、女装しているのに下着だけ男物というのは、かえって落ち着かないのだ。

ぴったりとしたショーツとブラジャー、そしてハイソックスの肌触りに、思わずムラムラしそうになってしまう——が、

「我慢、我慢……女装してオナニーだなんて、亜弓たちに知られたら怒られ——は、しなさそうだけど……やっぱり、まずいから……！」

（苦しかったらお部屋で「休憩」しても構わないから——）

前回の女装で母親にそう言われた——つまりはオナニーしてもいいと仄めかされた真弓だったが、なら遠慮なくと出来るはずもなく、けっきょく女子制服にムラムラしながら一日を過ごしたものの、女装オナニーはしていない。

「まあ、お風呂に入る前に脱いで返した後で、思い出しオナニーしちゃったんだけど……って、ダメダメ！」

その時のことを思い出し、またムラムラしそうになって、真弓は頭を振って追い払うが、「そういえば、あの制服はどうするんだろう。やっぱり、オレに回ってくるのかな……」

女兒スーツのタグを外し、ジャケットやリボンを外してベッドに並べながら、「亜弓の女子制服とか、ランドセルとか、小学校時代に使ってたものとか——今の流れだったら、絶対オレに『おさがり』って譲られる流れだよな……でもって、これからは毎日それを着るように言われたり——学校に、行かされたり……」

ゾワッ、と背筋が寒くなる。しかしそのせいでいっそう陰部は激しく疼き、真弓はショ

ツの上からそっと勃起を押さえた。

「は一つ、は一つ……い、今は余計なことは考えずに、スーツを、着ちゃわないと……」

息を大きく吐き出して雑念を払い、真弓はスカートを下ろし、ブラウスのボタンも外してゆく。ブラウスはよく見れば、普通的女子制服のそれとは違い、つるつるとしたサテン生地、前立ての左右や袖口に小さなレースがあしらわれていた。

「へえ、可愛い……」

つぶやきながら袖を通して羽織り、ボタンを留めなおす。肌の上をすべるように撫でるサテン生地の肌触りは、最初のジャンパースカートの時にも味わったがやはり独特で、女装している気分をいやがうえにも高めてくれる。

——そう、すでにその裾から覗いているショーツに、テントを張ってしまうほどに。

「はあっ、はあっ、落ち着け、落ち着け……！」

荒ぶる暴君を諫めつつ、ベッドに置いたスカートを手にする。

赤いチェックの、ボックスプリーツスカート。制服スカートに多い車ひだとは異なるのが、「卒服」という特別な一着であることを意識させられる。しかし構造ぞのものは大差ないため、

「ええと、まずは左脇のホックを外して……」

前回、プリーツスカートを穿いたので迷うことはない。足を通してウエストまで引き上げると、ホックを留めファスナーを上げる。しかし——

「す、スカートの前に、おちんちんが……！」

見下ろせば、本来であれば、卒業式を迎えた少女の身を包むべき赤いチェックのスカートの——少年の証の先端が、淫らなふくらみを作り上げていた。

「は一つ、は一つ……く、苦しい、けど、着ちゃわないと……！」

真弓は自分に言い聞かせながら、残る二つに取りかかった。

スカートとおそろいの、赤チェックリボン。ストラップについているホックで留めるようになっているため、初めての真弓にはややてこずった。

そしてエンブレム付きのブレザーを羽織り、ボタンを留めれば——

「あ、ああ……！」

ジャケットの重みは、高校の男子制服に近い。しかし明らかに違うスカートの穿き心地、サテンプブラウスの滑らかさ。見下ろせば襟元を飾るのも、ネクタイではなく可愛いリボンで、

「オレ——卒服の女儿スーツを、着ちゃったんだ……！」

改めて声に出し、そのことを自覚する。

「い、一応、身だしなみを確認しないと……」

ドキドキしながら、姿見に向かう。

恐る恐る鏡面を覗き込むと——そこに立っていたのは、妹以上に女の子らしい、卒業スーツに身を包んだ「少女」の姿。とてもそれが、来月には高校2年生になろうかという少年とは思えない。

「そうだ、髪も……」

背中に垂らした髪を後ろでまとめているゴムを引き抜くと、艶やかな黒髪が大きく波打ちながら広がって、いっそう女の子らしくなる。手櫛を通して横髪の一部を前に垂らして胸元にかかるようにすると、

「なんだか、楽しくなってきちゃう……」

リボンやヘアピンをつけたり、三つ編みにしたら似合うかもしれない——鏡を覗き込みながらそんなことを考えているところへ

「へえ、やっぱり似合ってるじゃん。鏡を覗き込んで、髪形も女の子っぽくしたいのかな？」

「あ、亜弓！？ これは、その——！」

「今さら誤魔化さなくってもいいのに。でも、へえ……」

亜弓はジロジロと、すっかり変わり果てた兄の姿を上から下まで見つめる。いや、その目つきは、妹が兄を見るものではなく——

「なかなか可愛いぞ、真弓」

「っ！？」

ふいに低くなった妹の声に、真弓は雷に打たれたように体を竦ませる。

上目遣いに彼女を見れば、凛々しい顔立ちにショートカット、美少女と言うより「イケメン」寄りのその美貌に、クールな笑みを浮かべていて——

「あ、あの、亜弓……？」

「あははっ、いまの声、ちょっと男の子っぽかったでしょ？」

いつも通りの表情に戻って、亜弓はケラケラと笑う。

真弓は胸をなでおろし、

「う、うん。脅かすなよ、もう……」

「そんなに怯えなくてもいいのに。それとも——期待してるのかな？」

「き、期待って、いったい、何を……」

「それはもちろん——こういうことさ」

「ひっ……！？」

ふいにぐっと近づいてきた妹の顔に、真弓は反射的に逃げようとする。

しかし彼女は兄の腰を左腕で抱え込むと、右手で顎をつまんで上を向かせ、さらに顔を近づけてきて——

「そんな目で見られたら——我慢できなくなってしまうだろう？」

「んっ……！？」

唇を、ふさがれた。

柔らかくも熱い粘膜同士の密着に、

(キ——キス、されてる……！？)

状況を理解しながらも、あまりにも非現実的な展開に脳が一切動かない。兄妹でキスすることの背徳を思っても、今の状況はあまりに非現実的だ。

妹から兄への接吻——しかし兄である自分の方が、強引なイケメンに唇を奪われた少女そのままに、胸の高鳴りを覚えてしまう。

永劫とも思える思考の空白も、実際にはほんの一瞬のことではなかった。

「くすくすっ、ごちそうさま」

顔を話した時にはもう、妹はいつも通りのいたずらっぽい表情に戻っていた。

「どう？ キスのお味は？」

「ど、どうっていわれても——よくわからなくて……」

「おや、それは残念だ。なら、もう一回しっかり……」

「しないから！ っていうかそのイケボ演技なに！？」

妹の腕から逃げ出して距離を取ると、

「あははっ、なかなか様になってたでしょ？ 中学に上がったら、王子様キャラで行こうかな」

「どうせすぐにボロを出しそうだけど」

「ちえー。ま、真弓ちゃんの反応が面白かったからよしとしますか。まずは下に降りて、ママに記念写真を撮ってもらいましょ。ね、真弓ちゃん？」

「うん……」

少年のようにふるまう妹と、少女のようにふるまう自分——双方に不安を覚えながらも、真弓は妹に言われるがまま、リビングに降りてゆく。

(ファーストキスだったんだけど、なあ……まさか妹に、しかも、あんな形で奪われるなんて……)

どんどん兄として大事なものを失っていくような気がして、真弓はこっそりため息をつくのだった。

……唇には、まるでやけどをしたかのような熱が、いつまでも残っていた。

＊

「あらあら、いいじゃない、二人とも」

兄妹がリビングに降りてゆくと、ソファでデジカメを弄っていた母親が顔を上げて、満面の笑みで出迎えた。

「真弓ちゃんがスカートで、亜弓ちゃんがパンツ。ふふっ、まるでカップルみたいでいい組み合わせね」

「うう、せめて逆じゃないのかな……」

男子高校生である真弓が、女の子らしい赤のリボンと、スカートのスーツ。

女子小学生である歩実が、男の子っぽい青のネクタイと、パンツのスーツ。

確かに対比と言えないこともないのだが、いろいろとおかしい。さらに、

(カップルだなんて、そんな——)

母親の言葉に先ほどの一幕を思い出し、顔と唇が熱くなってくる。少年に強引に迫られた少女のように、妹に初めてのキスを奪われてしまったのだ。

いっぽうの亜弓は「ふふん」と鼻で笑って、

「でしょ？ せっかくだから、ツーショットで撮ってちょうだい」

「ええ、もちろんそのつもりよ」

母親はカメラを持ったまま立ち上がると、

「さ、それじゃあ二人とも、玄関に行って、外に出てちょうだい」

「はい！」

「え……え！？」

あまりにも当然のように言われて、真弓は耳を疑って立ち尽くす。しかし玄関に向かい始めた妹の姿に我に返り、

「ちょ、ちょっと待って！ 外につて、まさかこのまま！？」

「当たり前でしょう？ なにか心配でもあるの？ ……って、ああ」

母親はようやく気が付いたかのように、胸元で手を合わせる。

その様子に、真弓は少し安堵するが——

「大丈夫よ、ちゃんと靴は用意してあるから。亜弓ちゃんのと違ってヒールは低めだけど、バックルがハートになった可愛いシューズを用意してあるからね」

「そ、そうじゃないってばあ！ こんな格好で外に出て、ご近所さんに見られたら——」

「ふふっ、その時は改めて挨拶すればいいじゃない。これからは女の子として生活しますって。さ、行くわよ」

息子の抗議などどこ吹く風、母親は娘とともに玄関に向かう。

「そんなあ……」

真弓は情けない声を出しながらも、二人の後を追いつつ——帰宅した時にどかした見慣れないストラップシューズを目にして、ようやく悟る。

「あ、あのシューズ、もしかして、オレの……？」

「ええ、そうよ。亜弓ちゃんはボーイッシュなブーツだけど、真弓ちゃんはああいう女の子っぽい靴の方が好きでしょ？」

「う……それは、そうだけど、でも外に出るなんて、オレ——」

「大丈夫だって。玄関先でならそんなに見られることもないし、見られてもあたしの友達だって思ってもらえるわよ。むしろ、ちゃんと女の子らしい口調にならないと、そっちの方が危ないんじゃない？」

「うっ……は、はい……」

妹のもっともな指摘に、真弓は渋々うなずきながらシューズを履く。足の甲の部分がストラップになっている以外は、男子用とほとんど変わらない——かと思いきや、

「なんだか、かかたが浮いてるような感じがする……！」

「くすくすっ、あたしのブーツほどじゃないけど、ヒールがついてるからね。あっ、でもそれを履けば、いつもより背が高く見えるんじゃない？」

「あっ、それはいいなあ……普段から履けば、背が高く見える……？」

妹の言葉に、身長がコンプレックスの真弓は思わずそんなことを考えてしまうが、

「見る人が見ればすぐわかつちゃうし、女子用のシューズだってのもバレバレだよ？」

「……やっぱりなしで」

言いながら立ち上がると、やはりヒールに違和感はあるが、視線は少し高くなったような気がする。

いや、正確に言えば、ヒールなどよりはるかに気になるのが——

「ほ、ほんとに、オレ——じゃなくて、わ、わたし、この格好で、外に……！？」

女子用の、スカートスーツ。レースのついたブラウスに、紺のジャケットと、赤系チェックのリボンとひざ丈スカート。

何度か女装してきた真弓とは言え、外に出るとなると緊張と羞恥の桁が違う。青ざめた顔でガクガクと震えながら、外へとつながる扉を見つめていると——その彼の手を、亜弓が握り、安心させるように笑いかける。

「ちゃんと女の子に見えてるから大丈夫。堂々としてれば逆にバレないから、あとは度胸だよ、真弓ちゃん。ほら、顔を上げて、胸を張って」

「う、うん……！」

背筋を伸ばした真弓の前で、ゆっくりと、扉が開いてゆき——

別世界が、広がっていた。

光が溢れ、体を包むスーツを照らす。

風が流れ、腰にまとうスカートを揺らす。

扉の外に広がっているのは、ふだん家を出てすぐ目に入ってくる、ごくありふれた住宅街の景色。なのに、まるで異郷に迷い込んだかのような不安に襲われる。胸を押しつぶされそうになりながら――

「さあ、真弓ちゃん」

「う、うん……！」

真弓は妹に手を引かれ、外へと歩き出していた。

玄関ポーチに出ると、視界が開け、光と風はいつそう強くなる。心臓は今にも破裂しそうなほどに高鳴り、すっかり怯えて周囲の様子をうかがっていると、

「くすくすっ、なんだか点滴を警戒してる小動物みたいで可愛い」

「うう……っっていうか、これ、どこまで行くの？ まさか道路まで……」

「ふふっ、それは安心していいわ。ここで撮影しちゃうから」

カメラを持った母親が、そう言って外に出てくる。玄関ドアを閉めると、表に続くステップを数歩行って振り返り、

「さ、二人とも、撮ってあげるから、こっちを向いて並んでちょうだい」

「はい！」

「は、はい……」

真弓は脚を内股に閉じて、スカートの前に手をそろえ。

亜弓は脚を肩幅に開いて、片手を腰に当てて。

スカートとパンツ。それぞれが着ているスーツにふさわしい、対照的な兄妹のポーズに、母親は小さく笑って、

「はい、チーズ」

シャッターを切り、我が子の姿を写真に収めてゆく。

さらに何枚か、カメラにピースサインを向けたり、手を握ったり、抱き合ったり――亜弓が顔を近づけて来てドキドキする真弓だった――、そんなポーズでの撮影ののちに、

「……うん、こんなものかしら」

「ほっ……」

ようやく撮影終了の声がかかり、真弓はほんと安堵する――が、

「ふふっ、ふたりとも卒業スーツがよく似合ってるわね。せっかくだし、今日で何から卒業するのか、改めて言ってもらいましょうか？」

「え、え……？」

「はい！ あたしは小学校を卒業して、来年度から、中学生になりまーす！」

「ふふっ、そうね。亜弓ちゃんは、小学校を卒業するのよね。じゃあ――真弓ちゃんは？」

「え、ええと……」

とっさに思いつかずに困惑していると、隣の亜弓がニヤニヤ笑いながら助け舟を出す。

「いまの真弓ちゃんが卒業するものって言ったら、決まってるでしょ？ ほら、今こうして、女の子の格好をしてるんだから——」

「そ、それは……でも……」

亜弓の言わんとするところを理解しながらも、恥ずかしさにためらう真弓。しかし、
「あれー？ せっかくママにスカートスーツとシューズまで用意してもらったのに、まだ迷ってるのかな？ 可愛い卒業スーツにふさわしい『卒業』の言葉——あたしもママも、真弓ちゃんの口から聞きたいんだけどなあ？」

「う、うううっ……わ、わかりました……」

最初からここまで用意されていたのだ——今さらながら理解して、逃げ場のないことを悟った真弓は、顔を上げて、はっきりと口にする。

「わ、わたし、は……だ、男子高校生から、卒業、して……お、女の子に、なります……っ」

「ふふっ、はい、よく言えました」

満足げに笑う母親と妹に、真弓は慌てて言い添える。

「で、でも！ほんとに、高校をやめたり、女の子になったりできるわけがないから……その、せめて、家の中で、だけに……！」

「ええ、わかってるわよ。これから真弓ちゃんは、女の子——おうちの中でだけ、ね」

「うん……」

外でも——とは言われずに済み、ほんの少し胸をなでおろす真弓。

しかし話は、さらに思わぬ方向へと転がってゆく。

「そういえば亜弓ちゃん、卒業してもう使わなくなった制服とかランドセルが、ちょうどよくあったわよね？」

「うん。服や下着なんかも、可愛いのはもうほとんど着ないし」

「だったらそれ、ぜんぶ真弓ちゃんにあげてちょうだい。で、真弓ちゃんはそれを部屋着にするように。いいわね？」

「はい！」

「うっ……は、はい……」

「妹の制服やランドセルをおさがりとして譲られる」——ノートに書いた妄想が思わぬ形で実現し、真弓は真っ赤になってうなずく。

（これからは、家の中では、女装——）

今までも、女装は何度かさせられていたが、普段着については何も言われなかった。しかしこれからは、家の中では女装しなくてはいけないのだ——思いもかけぬ「卒業」に、真弓は新たな日々の始まりを予感するのだった。

（続く）